岐阜大学地域科学部研究報告第 50 号： 53 － 68 （2022）

食から見るユートピア

――17 世紀イングランドにおける自然哲学の有用性――

柴　田　和　宏*

(2021 年 10 月 20 日受理)

Food in Utopian Literature

――The Usefulness of Natural Philosophy in the Seventeenth-Century England――

Kazuhiro Shibata

1. はじめに

1626 年に出版されたフランシス・ベイコンの『ニュー・アトランティス』(*New Atlantis*) は、現代の言葉で言うなら科学・技術によって繁栄するユートピアを描いた作品として有名である。おもな舞台となるのはベンサレムという島国で、この島国の中心は「ソロモンの家」と呼ばれる自然哲学研究所である。ここでは技術的応用に結びつくような数々の研究がなされており、その研究成果は、島国の物質的な豊かさに結びついていることがうかがえる[1]。17 世紀には、ベイコンのものと同じように、自然哲学の研究やそ

---

* k_shiba@gifu-u.ac.jp
本稿は、日本英文学会第 92 回大会シンポジウム「The isle is full of noises：近世イングランド文学とユートピア的『島』幻想」（2020 年 7 月、ウェッブカンファレンス）での発表原稿に加筆修正をほどこしたものです。北村紗衣先生、鈴木雅恵先生、松田幸子先生、およびウェッブカンファレンス参加者の方々から貴重なコメントをいただいたことに感謝いたします。また、シンポジウムに参加する機会をあたえてくださった日本英文学会と大会実行委員会の皆様方に感謝いたします。本研究は JSPS 科研費 JP18K12272 の助成を受けたものです。
本稿で使用した各テクストには、邦訳がある場合にはその情報を付記した。また引用時には邦訳を利用させていただいたが、必要におうじて改変した。
[1] Francis Bacon, *New Atlantis*, in *The Works of Francis Bacon*, ed. James Spedding, Robert Leslie Ellis and Douglas Denon Heath, 14 vols. (London: Longman, 1857–1874), 3:119–166 (以下 *Works*). 邦訳『ニュー・アトランティス』川西進訳（岩波書店、2003 年）。『ニュー・アトランティス』については Bronwen Price, ed., *Francis Bacon's New Atlantis: New Interdisciplinary Essays* (Manchester: Manchester University Press, 2002) 所収の各論考を見よ。

の技術的応用を描いたユートピア作品がおおく書かれた。本稿ではこうした作品をいくつか取りあげて分析していく。

自然哲学が技術的成果や有用性に結びつくべきだという議論は、ベイコンやその影響を受けた自然哲学者たちに広く見られる。ロバート・ボイル（Robert Boyle, 1627–1691年）もその一人である。彼は『実験的自然哲学の有用性についての考察』（*The Usefulness of Natural Philosophy*, 1663 年）という著作を書いた。彼は、自然哲学の知識をもつことは、たんに自然について論じられるようになるだけでなく、自然を支配（master）できることでもあるはずだという考えを表明したうえで、直後につづけて、具体例をまじえてこう説明している。

> そして私は、他人の知識を判断しようなどとは思わないが、私自身にかんしては、私の技能によって、自然学（Physiology）の初心者のものとくらべて、畑でよりよい草花を、果樹園でよりよい果物を、畑でよりよい穀物を、酪農場でよりよいチーズを作れるようになるまで、自分自身が真の自然学者（a true Naturalist）であるなどとあえて考えることはないだろう[2]。

ここで表明されているのは、農家や酪農家ではなく自然哲学者こそが農業や酪農の本当の専門家だという発想であり、現場の技術知を軽視する傾向があることはいなめない[3]。

現在の議論にとって重要なのは、ボイルが、自然哲学にもとづく有用性や自然の支配の例として、食べ物の改良を挙げていることである。飲食物の改良への関心は、彼だけのものではなかった。彼は草創期のロンドン王立協会（Royal Society、1660 年設立、1662 年王認）で中心メンバーの一人であった。そして王立協会の会合でも、やはり食べ物や飲み物に関連する話題が取りあげられた。一例を挙げると、1662 年 12 月 10 日には、のちに協会フェローにもなるジョン・ビール（John Beale）から伝えられた、シードル（りんご酒）にかんする情報がくわしくあつかわれている。翌週 17 日にも、ワインやビールなどの飲料や、それらに関連する諸実験が話題となっている[4]。

このように 17 世紀の自然哲学にとって、飲食物の改良が重要課題であったとするな

---

[2] Robert Boyle, *The Usefulness of Natural Philosophy: The Second Part*, in *The Works of Robert Boyle*, ed. Michael Hunter and Edward B. Davis, 14 vols. (London: Pickering & Chatto, 1999–2000), 3:295.

[3] マイケル・ハンター『イギリス科学革命：王政復古期の科学と社会』大野誠訳（南窓社、1999 年）、101–126 頁は、本論文で引用したボイルの議論も含め、初期王立協会における有用性を分析している。それによれば、初期の協会には有用性への強い志向があったが、実際に技術改良が実現できた例はおおくなかった。ハンターは原因の一つとして、技術改良が、自然哲学者たちが考えていたほど単純な問題ではなかったことを指摘している（112–113、119 頁）。

[4] Thomas Birch, *The History of the Royal Society of London*, vol. 1 (London, 1756), 144–163. 初期王立協会の農業や食への関心とビールの活動については、Mayling Stubbs, “John Beale, Philosophical Gardener of Herefordshire: Part II. The Improvement of Agriculture and Trade in the Royal Society (1663–1683),” *Annals of Science* 46 (1989): 323–363 を見よ。

らば、自然哲学を重要視していた当時のユートピア作品のなかにも、関連する議論があらわれているのではないだろうか[5]。以下では、おもに次の四つのユートピア作品に注目し、それぞれが飲食物をどう論じていたのかを比較検討していく。

（1）ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ『クリスティアノポリス』（1619 年）
（2）『ニュー・アトランティス』（1626 年）
（3）ガブリエル・プラッツ『マカリア』（1641 年）
（4）R. H.『ニュー・アトランティスの続編』（1660 年）

主要な分析対象としてこれら四作品を取りあげたことには理由がある。まず、これらの作品はいずれも、自然哲学の研究を重要なテーマとして描いているという特徴がある。さらに、これらの作品のあいだには直接的な影響関係がみとめられる。『ニュー・アトランティスの続編』が『ニュー・アトランティス』の議論を下敷きにしていることはタイトルからもあきらかである。また後述のように、『マカリア』には『ニュー・アトランティス』や『クリスティアノポリス』からの影響がみとめられる。自然哲学という共通するテーマをあつかっており、影響関係もある諸作品に着目することで、それらのなかで飲食物が占める位置づけの差異や変遷が見えやすくなると期待できる。

2. 飲食物のおいしさと健康効果

ユートピアとはなんだろうか。政治思想史の研究者である菊池理夫は、ルネサンス・ユートピアを「現実の社会に対する批判的意識から、それよりもすぐれていると思われ、かつ現実には存在しない諸制度を有する社会を、形式的には虚構的空間に設定して、全体的かつ具体的な像として提出する思考実験である」と定義している[6]。ルネサンス・ユートピアと呼ばれることがおおいのは、モア（Thomas More, 1478–1535 年）の『ユートピア』（*Utopia*, 1516 年）から 17 世紀前半ないし中盤頃までの作品である[7]。とくに出発点にあたるモアの『ユートピア』にかんしては、描かれているのが本当にモア自身のめ

---

[5] 田村真八郎『ユートピアと食生活』（農山漁村文化協会、1981 年）は、幅広い時代、地域のユートピア作品に描かれる食生活を紹介している。
[6] 菊池理夫「『ニュー・アトランティス』とルネサンス・ユートピア」『ユートピア学の再構築のために：「リーマン・ショック」と「三・一一」を契機として』（風行社、2013 年）、139–165 頁の、148 頁。
[7] 菊池「『ニュー・アトランティス』とルネサンス・ユートピア」139 頁は、ベイコンを、モアからはじまるルネサンス・ユートピアの伝統の最後に位置づけている。Chloë Houston, *The Renaissance Utopia: Dialogue, Travel and the Ideal Society* (London: Routledge, 2016 [originally published in 2014]) は、語りの形式という観点を軸に、モアの『ユートピア』から 17 世紀中盤までの諸作品を論じている。

ざした理想社会なのかどうか論争がある[8]。またユートピア作品といっても多様であり、空想の要素が強いものもあれば、現実性が高いものもある[9]。本稿で考察する『マカリア』は後者の代表例で、後述のように、議会にたいする社会改良の提案書という性格が強い。このように違いはあるものの、どのユートピア作品も、なんらかの仕方で、著者が生きた現実の社会を批判または風刺し、よりよい社会を考察するきっかけとして書かれたものだとは言ってよいだろう[10]。

17 世紀の各種ユートピア作品のなかでは、しばしば食事や飲食物の生産に関連するシーンが描写されている。これらの問題が社会のあり方を考えるうえで重要なテーマの一つになっていたことの現れであろう。ユートピア作品に登場する食事や飲食物は、当時のヨーロッパのそれと比較してどのような点でよりよいものとして描かれていたのだろうか。

飲食物が中心的テーマとなっている理想社会の記述といえば、中世に広く存在した民間伝承のコケイン（お菓子の国）をまず挙げることができる。コケインは物質的にきわめて豊かな社会であり、住民は苦しい労働から解放されているとされる。そしてなんといってもさまざまなおいしい飲食物が満ちあふれており、それらがなんの苦労もなく入手できるのである[11]。しかしこれから見ていくように、本稿で検討する 17 世紀のユートピア作品で描かれる社会では、コケインのように豊富な飲食物が所与のものとしてあたえられているわけではない。質的また量的にすぐれた飲食物は、自然哲学研究やそれにもとづいた農業の実践などによってはじめて実現されるものとなっている。

とはいえユートピアは、まずおいしい食べ物が豊富にある社会として描かれていることもおおい。たとえばモアの『ユートピア』では、描かれるユートピアの人びとはホールで共同食事をとると言われている。このユートピアでは自宅で食事をとることは禁じられてはいないが、ホールにはすばらしい豪華な（lautu[s] atque opiparu[s]）食事があるのに、わざわざ自分でそれよりも劣った食事を作る人はいないという[12]。そして食事シ

---

[8] この論争については、J. C. Davis, “Thomas More’s *Utopia*: Sources, Legacy and Interpretation,” in *The Cambridge Companion to Utopian Literature*, ed. Gregory Claeys (Cambridge: Cambridge University Press, 2010), 28–50 を見よ。

[9] 田村秀夫『イギリス革命とユートウピア：ピューリタン革命期のユートウピア思想』（創文社、1975 年）。本書は、イングランドの革命期から王政復古期に書かれた各種ユートピア作品を、革命の進展などの時代背景や、各著者の政治的・宗教的立場をふまえて分析した、すぐれた通史となっている。

[10] Fátima Vieira, “The Concept of Utopia,” in Claeys, *The Cambridge Companion to Utopian Literature*, 3–27 は、より幅広い時代を射程としてユートピア思想の特徴とその歴史的変化を概説しており、よい見通しをあたえてくれる。

[11] コケインについては、アーサー・レスリー・モートン『イギリス・ユートピア思想』上田和夫訳、改版（未來社、1986 年）、第 1 章、Herman Pleij, *Dreaming of Cockaigne: Medieval Fantasies of the Perfect Life*, trans. Diane Webb (New York: Columbia University Press, 2001) を見よ。

[12] Thomas More, *Utopia*, in *The Complete Works of St. Thomas More*, vol.4, ed. Edward Surtz and J. H. Hexter (New Haven: Yale University Press, 1965), 140 (邦訳『ユートピア』澤田昭夫訳、改版、中央公論新社、1993 年、147 頁).

ーンのなかでも、年長者が最初に料理の最良の部分を受け取って、必要とあらばそれを周りに分けあたえる風習があること、食事時には音楽やデザートが欠かせないこと、香がたかれることなど、住民がおいしい食事を楽しむ様子が描かれる[13]。

ベイコンの『ニュー・アトランティス』では、ユートピアである島国ベンサレムの物質的豊かさは、そこを訪れた主人公にたいして、まずなによりも食べ物や飲み物のおいしさ、すばらしさによって強く印象づけられる。主人公たちは南アメリカから日本と中国に向かうため太平洋に船出したものの、失敗して漂流する。そのとき偶然ベンサレムという島国にたどりつく。主人公たちはまずその島国の役人たちにあたたかく迎えられ、来航者専用の宿舎である「異人館」（Strangers' house）の部屋をあてがわれるなど、手厚くもてなされる[14]。そしてそのなかで次のようなシーンが描かれる。

> 間もなく食事が出た。パンもおかずも大変なご馳走で、私の知っているヨーロッパのどの学寮の食事よりも良かった。飲物は三種類あり、どれも健康的で美味（wholesome and good）だった。葡萄酒と、エールに似ているがより透明な色の穀物酒、それに当地の果物から造った、シードルの一種で実に口当たりの良い、爽やかな味の飲物である[15]。

主人公たちは種々のできごとをとおして、ベンサレムがヨーロッパと比較して道徳的にもすぐれ、物質的にも豊かな社会だと認識していくが、物質的な豊かさを見せつけられる重要な場面の一つがこの食事だと言える。

前述のとおり、主人公たちがおいしい料理をふるまわれたのは、来航者用の施設でのことだった。ではベンサレムに暮らしている住民たちも、漂着した旅人である主人公らと同じように、おいしい食べ物と飲み物を日々享受しているのだろうか。もちろんその可能性は十分にあるが、ベイコンが具体的にそのさまを描くことはほとんどない。さらに言えば、『ニュー・アトランティス』では、食事だけでなくベンサレムの島の住民たちの暮らしのほかの側面についても、具体的な描写はきわめてとぼしい。例外として、結婚にかんする制度の説明と、一族の繁栄を祝して開催される「家族の祝宴」（feast of the family）と呼ばれるイベントの描写がある[16]。家族の祝宴にはディナーが含まれると

---

[13] More, *Utopia*, 142–144 (『ユートピア』149–150 頁). Susan Bruce, "Virgins of the World and Feasts of the Family: Sex and the Social Order in Two Renaissance Utopias," in *English Renaissance Prose: History, Language,and Politics*, ed. Neil Rhodes (Tempe: MRTS, 1997), 125–146, on 131–132 は、ホールの会食には一見男性も女性も平等に参加しているように見えるが、実際にはおおくの女性には育児の役割が割りふられており、平等になっていない点を指摘している。

[14] Bacon, *New Atlantis*, in *Works*, 3:129–134 (『ニュー・アトランティス』7–14 頁).

[15] Bacon, *New Atlantis*, in *Works*, 3:134 (『ニュー・アトランティス』14–5 頁).

[16] 家族の祝宴は、Bacon, *New Atlantis*, in *Works*, 3:147–151 (『ニュー・アトランティス』37–42 頁)、結婚制度は Bacon, *New Atlantis*, in *Works*, 3:151–154 (『ニュー・アトランティス』43–48 頁) で描かれる。

されるが、こうしたディナーで具体的にどのような食事が出されているのかについてはなんの情報もない。

それでも、家族の祝宴の描写からは、祝宴の食事が厳粛でつつましいことはあきらかに読みとれる。ベイコンは、祝宴の食事において給仕が整然とおこなわれることや、最大の祝宴（the greatest feasts）であってもディナー（正餐）が 1 時間半以上続かないこと、食事の終わりには賛美歌が歌われることなどを描いている[17]。ベイコンの時代のイングランドの祝宴をふまえるならば、ベンサレムの祝宴の厳粛さは特筆に値する。当時のイングランドの祝宴は、富や権力を誇示するという意味をもつもので、内容としては、何回にもわけて大量の料理が給仕され、合間には多数の砂糖菓子が並ぶバンケットが催されるという具合だった[18]。ベイコンはとくにはなやかな暮らしをした人物として知られ、関連するエピソードも残されている。たとえば 1613 年、法務長官に昇進したベイコンは、クリスマスに「ケンブリッジの大学全体を祝宴でもてなし」ている。また 1621 年、政治的キャリアの絶頂期にあった彼は、寒波が到来して食糧不足が起こっているさなかに、みずからの 60 歳の誕生日を祝う盛大な宴会を開いた（失脚する直前のことである）[19]。

『ニュー・アトランティス』では、ベンサレムの住民の暮らしがほとんど描かれていないかわりに、「ソロモンの家」と呼ばれる研究施設についての記述が中心を占めている。「ソロモンの家」には多種多様な設備があり、そこでさまざまな実験がおこなわれているとされる。そのなかには飲食物に関係するものもおおい。まず目につくのは農業技術である。果樹園や菜園（orchards and gardens）ではさまざまな実験がおこなわれ、技芸によって自然にあるよりも大きな果物を作ったり、味や香りを変化させたりすることが可能になっているとされる[20]。また醸造や調理をおこなう施設もあり、そのなかで

---

[17] Bacon, *New Atlantis*, in *Works*, 3:150 (『ニュー・アトランティス』41 頁). Bruce, “Virgins of the World” は『ニュー・アトランティス』の社会を『ユートピア』と比較している。そして、家族の祝宴で女性や母親が周縁化されていることをベンサレムの父権的社会の象徴とみなしつつ、この社会では家族のおもな役割は、科学の進歩にもとづく国力の増強に資するため子を生むことになっていると論じている。ただし Kate Aughterson, “‘Strange Things So Probably Told’: Gender, Sexual Difference and Knowledge in Bacon’s *New Atlantis*,” in Price, *Francis Bacon’s New Atlantis*, 156–179 は、家族の祝宴における母親の地位はかならずしも低いものではないと指摘している。

[18] 当時の祝宴についてはたとえば、スーザン・グルーム『図説　英国王室の食卓史』矢沢聖子訳（原書房、2021 年）、43–97 頁、Peter Brears, *Cooking and Dining in Tudor and Early Stuart England* (London: Prospect Books, 2015), 581–604, 519–528 を見よ。

[19] Lisa Jardine and Alan Stewart, *Hostage to Fortune: The Troubled Life of Francis Bacon 1561–1626* (London: Victor Gollancz, 1998), 344, 442. 17 世紀の伝記作家ジョン・オーブリも、ベイコンの生活のはなやかさを報告している。彼が田舎の邸宅（カントリーハウス）にいるときは、近くの町は宮廷がそこに引っ越してきたかのようなありさまだったという。*‘Brief Lives,’ Chiefly of Contemporaries, Set Down by John Aubrey between the Years 1669 & 1696*, ed. Andrew Clark, vol. 1 (Oxford: Clarendon Press, 1898), 71 (邦訳『名士小伝』橋口稔、小池銈訳、冨山房、1979 年、189 頁).

[20] Bacon, *New Atlantis*, in *Works*, 3:158 (『ニュー・アトランティス』54–55 頁). このような果物

は次のような飲食物が生みだされているとされる。

> 数種の植物や根、スパイス、さらには肉や乳製品を混ぜて醸造した飲み物もあり、飲料と食料を兼ねた働きをするものもあるほどである。そのため、多数の人々、特に老人が愛用し、これ以外パンもおかずもほとんど口にしない人もいる[21]。

> パンは数種類の穀類、草木の根、種、いやそれどころか乾燥した肉、魚さえ原料にもちい、それにさまざまな酵母と調味料を入れて作る。従ってある物はたいへん食欲をそそり（some do extremely move appetites）、ある物は滋養分に富むので、他の食べ物は一切摂らず、これだけを食べる人もいるほどである。こうした人はきわめて長命である[22]。

この箇所の記述からは、少なくとも「ソロモンの家」で研究されている飲み物や食べ物が、ベンサレムの人びとの手にもわたっており、それらの人びとは研究成果を享受していることがうかがえる。そしてたしかにパンのなかには食欲をそそるおいしいものが含まれると描かれている。とはいえここで描かれている飲み物やパンは、それ一種類だけ摂取していれば生きていける、現代で言うなら「完全栄養食」のようなものではないだろうか。実際ベイコンは、想像上の世界だけでなく、現実的にも、それだけを摂取すれば栄養がとれるような飲食物に関心をしめしており、みずからの自然誌的・自然哲学的著作のなかでもその可能性を論じている[23]。

だがいくら食欲をそそるものであったとしても、毎日栄養のある特定の飲み物だけを飲んで、あるいはパンだけを食べて暮らすのは、よりよい社会においてめざされるべき豊かな食生活だったのだろうか。「家族の祝宴」の厳粛なディナーにしても、完全栄養食としての飲み物やパンにしても、おいしさや食の快楽の追求という観点からすれば、それほど魅力的であるようには思われない。

むしろ「ソロモンの家」における飲食物の改良では、快楽よりも健康や長寿など医学的効果が重視されているように思われる。すでに多くの先行研究で指摘されているとおり、「ソロモンの家」の研究では、健康や長寿に関連する内容がかなりの部分を占めている[24]。先ほど引用した箇所で言及された特別なパンには、長生きを可能にする力があ

の改良を、ベイコンは彼以前の研究に影響を受けつつ、現実にも熱心に追求していた。Doina-Cristina Rusu, “From Natural History to Natural Magic: Francis Bacon’s *Sylva sylvarum*,” PhD diss., Radboud University Nijmegen, 2013.

[21] Bacon, *New Atlantis*, in *Works*, 3:160 (『ニュー・アトランティス』56–57 頁).

[22] Bacon, *New Atlantis*, in *Works*, 3:160 (『ニュー・アトランティス』57 頁).

[23] Bacon, *Historia vitae et mortis*, in *The Oxford Francis Bacon*, ed. Graham Rees et al., 15 vols. (Oxford: Clarendon, 1996–), 12:314.

[24] たとえば、Richard Serjeantson, “Natural Knowledge in the *New Atlantis*,” in Price, F*rancis Bacon’s New Atlantis*, 82–105.

るとされていた。それ以外にも、味や香りなどがよいだけでなく、薬用にもなるような種々の果物、消化によい食べ物、体を強くする食べ物、豊富な原料から作られる数々の医薬、健康保持や病気の治療に効果的な空気を入れた部屋、湯治に役立つ浴場などがあるとされている[25]。

3. 『クリスティアノポリス』と節制の徳

科学史家のスティーヴン・シェイピンが強調したように、17 世紀のヨーロッパでは、飲食は健康のみならず道徳にも関係していた。君主にアドバイスをあたえる「君主の鑑」と呼ばれる作品群などでも、いかに食べるべきかが重要なテーマとなった[26]。各種ユートピア作品のなかでも、食はしばしば道徳と深く関わりあっている。たとえばトマス・モアの『ユートピア』では、先ほど見たとおり食事のおいしさや快楽の肯定的評価がなされている一方で、食の記述において中心を占めているのは道徳的問題であるように思われる。ユートピアの住民は大きな広間に集まり、共同で食事をとること、またその際には住民は年齢や地位などにおうじてふさわしいふるまいをし、適切な話をすることなどが描かれている。共同食事は、古代ギリシアではスパルタ等のポリスで実践されていたもので、モアの友人エラスムスも推奨していた[27]。

以下では、食と道徳というトピックに深くかかわるユートピア作品として、ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ（Johann Valentin Andreae, 1568–1654 年）の『クリスティアノポリス』（*Reipublicae Christianopolitanae descriptio*, 1619 年）を取り上げよう。この作品は、しばしば『ニュー・アトランティス』などとならんで、この時代の自然哲学の発展を反映したユートピアの一つとして言及されることがおおい[28]。実際、『クリスティアノポリス』には化学／錬金術を中心に当時の自然哲学の発展をふまえた記述が見られ、実験室（laboratorium）などの設備があるとされている。そして『ニュー・アトランティ

---

[25] Bacon, *New Atlantis*, in *Works*, 3:158–161 (『ニュー・アトランティス』54–58 頁).

[26] Steven Shapin, “How to Eat Like a Gentleman: Dietetics and Ethics in Early Modern England,” in *Right Living: An Anglo-American Tradition of Self-Help Medicine and Hygiene*, ed. Charles E. Rosenberg (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2003), 21–58.

[27] More, *Utopia*, 140–144 (『ユートピア』146–150 頁). ドミニク・ベーカー＝スミス『モアの「ユートピア」』門間都喜郎訳（晃洋書房、2014 年）、151–152 頁も見よ。古代の共同食事については、ポーリーヌ・シュミット＝パンテル「ギリシア市民社会での儀式としての共同食事」宮原信訳、ジャン＝ルイ・フランドラン、マッシモ・モンタナーリ編『食の歴史 I』（藤原書店、2006 年）、191–210 頁。

[28] たとえば、アレン・G・ディーバス『ルネサンスの自然観：理性主義と神秘主義の相克』伊東俊太郎、村上陽一郎、橋本眞理子訳（サイエンス社、1986 年）、198–199 頁は、『クリスティアノポリス』と『ニュー・アトランティス』が「著しく類似して」いると指摘している。『クリスティアノポリス』、とくにその宗教的コンテクストについては、副島美由紀「J. V. アンドレーエの『クリスティアノポリス』: 薔薇十字・敬虔主義・啓蒙主義を繋ぐユートピア」『小樽商科大学人文研究』第 109 集（2005 年）、17–48 頁を見よ。

ス』同様に、そうした設備を使った研究をもとに、たとえばすぐれた医薬を有していることが描かれている[29]。

しかし『クリスティアノポリス』では、飲食物にかんしては『ニュー・アトランティス』のように熱心な自然哲学的研究がされている様子はうかがえない。その一方で、節制の徳や宗教的な禁欲主義がかなり重視されているように思われる。当時の西欧の養生法や食にかんする道徳のなかでは、節制は中心的なテーマであった[30]。『クリスティアノポリス』においても、飽食批判は非常に重要な規範となっている。クリスティアノポリスにあるという十項目の道徳規範のうちの六番目には「われわれは、青年の無垢と乙女の処女性と結婚の純潔とやもめの汚れなき節度を守り、肉の贅沢と大欲を節度と空腹によって支配するよう努めます」とある[31]。

同様の思想は、『クリスティアノポリス』で詳細に描写される、教育内容のなかにもみとめられる。クリスティアノポリスの学校には八個の講義室があり、その七つ目では倫理学や政治学が教えられるとされている。しかしその説明のすぐあとには「キリスト教的貧しさについて」と題された章が設けられ、倫理学や政治学の教えを実践するだけでは不十分だと言われている。そしてキリスト自身を教師として模倣し、現世的なものを拒絶することが重要だとされる。そして、このような態度を取る人びとは次のように描写されている。「賢慮よりも純真が、知識よりも無知が、雄弁よりも沈黙が、威厳よりも謙虚さが、狡猾さよりも信頼が、満腹よりも空腹（jejunium）が、人に教えることよりも学ぶことが、能動よりも受動が、そしてこの地上でもっとも低いものがみな、喜ばれるのであって、無垢がともなうかぎり、彼らはこれらを求めるのです[32]。」

『クリスティアノポリス』には、このように宗教的な要素の強い飽食批判が見られるが、同時に飢餓が除去されていることも説明される。ところが注目すべきことに、クリスティアノポリスは、食料がそれほど多くある場所ではないとされる[33]。また、農業や製パンなどにかんする記述はあるものの、自然哲学研究や農業の改良にもとづいて食料を増産しようという発想も見られない[34]。ではどのようにして飢餓が取りのぞかれてい

---

[29] Johan Valentin Andreae, *Reipublicae Christianopolitanae descriptio* (Strasbourg, 1619), 100–103 (邦訳「クリスティアノポリス」加藤守道訳、池上俊一編『原典ルネサンス自然学』下、名古屋大学出版会、2017 年、705–795 頁の、744–745 頁). Charles Webster, *The Great Instauration: Science, Medicine and Reform 1626–1660* (London: Duckworth, 1975), 249 は、化学／錬金術が重視されている点で、『クリスティアノポリス』は、伝統的な養生法にもとづき健康・長寿を実現した社会を描くカンパネッラ（Tommaso Campanella, 1568–1639 年）の『太陽の都』（*La città del sole*）などと違うと指摘している。

[30] Shapin, “How to Eat Like a Gentleman.” 柴田和宏「フランシス・ベイコンとイングランドにおける養生法の伝統」『岐阜大学地域科学部研究報告』第 45 巻（2019 年）、21–42 頁も見よ。

[31] Andreae, *Christianopolitanae descriptio*, 75 (「クリスティアノポリス」734 頁).

[32] Andreae, *Christianopolitanae descriptio*, 158–159 (「クリスティアノポリス」769 頁).

[33] Andreae, *Christianopolitanae descriptio*, 38–39 (「クリスティアノポリス」720 頁).

[34] Andreae, *Christianopolitanae descriptio*, 36–39 (「クリスティアノポリス」719–720 頁).

るのかというと、まず飢餓の原因は、一部の人びとが食料を過剰に手にし、飽食していることだとみなされる。そしてそのような状態を起こさないための配給制度があると説明されている。共同食事を描いていたモアの『ユートピア』とは異なり、『クリスティアノポリス』では、食事そのものは私的なものとなっている。だが食料については配給制度が取られており、公的にあたえられることになっているのだ[35]。配給の担当者は、飢餓も飽食も起こらないような量の食料を住民たちに分配するとされている[36]。

4. 農業と飲食物の改良：『マカリア』、『ニュー・アトランティスの続編』

イングランドでも、17 世紀前半は飢饉が続いた時代であった[37]。おそらくそのような時代背景もあって、イングランドでこの頃書かれたユートピア作品のなかにも、飢饉への対処法や食料の生産量に関連する問題が描かれていることもおおい。革命期から王政復古期にかけてのイングランドでは、さまざまなユートピア作品が書かれた。その一つが、ガブリエル・プラッツ（Gabriel Plattes, c.1600–1644 年）が執筆した『マカリア』（*A Description of the Famous Kingdome of Macaria*, 1641 年）である。プラッツは、サミュエル・ハートリブ（Samuel Hartlib, c.1600–1662 年）を中心とするいわゆる「ハートリブ・サークル」の一員であった。『マカリア』はかつてハートリブ自身の作と考えられていたが、現在では、ハートリブが部分的に寄与した可能性はあるものの、プラッツが著者だと考えられている[38]。

『マカリア』は、ある種のユートピア作品ではありながら、社会改革の実践的な方向性をしめすために、議会に向けて書かれた具体的な改革案という側面が強い。学者と旅行者のあいだの対話のかたちで書かれた比較的短いテクストである。旅行者がマカリア王国のすぐれた制度を説明し、イングランドでもそれにならった改革をおこなうことの重要性を説くという内容になっている[39]。

---

[35] Andreae, *Christianopolitanae descriptio*, 48–49 (「クリスティアノポリス」723–724 頁).
[36] Andreae, *Christianopolitanae descriptio*, 85–86 (「クリスティアノポリス」738 頁).
[37] たとえば J. A. シャープ「経済と社会」稲垣春樹訳、ジェニー・ウァーモールド編『オックスフォードブリテン諸島の歴史 7：17 世紀 1603 年–1688 年』（慶應義塾大学出版会、2015 年）、第 5 章、202–209 頁を見よ。
[38] Charles Webster, “The Authorship and Significance of *Macaria*,” *Past and Present* 56 (1972): 34–48.
[39] Oana Matei, “*Macaria*, The Hartlib Circle, and Husbanding Creation,” *Society and Politics* 7, no. 2 (2013): 7–33 に、付録として『マカリア』のテクストと詳細な注が含まれている。以下テクストはこれを使用し、“*Macaria*” と略記した。邦訳「有名なマカリア王国の記述」相馬伸一訳『西洋教育史研究：筑波大学外国教育史研究室年報』第 19 巻（1990 年）、143–154 頁。田村『イギリス革命とユートウピア』、13–30、50–53 頁は、『マカリア』をハートリブの作とみなしているものの、内容について充実した解説をあたえている。ベイコンやアンドレーエからの影響についても、田村『イギリス革命とユートウピア』18 頁とその注を見よ。山本は、プラッツを含むハートリブ・サークルの人びとを、当時不信の目で見られてもいた事業家たち

『マカリア』は、これまで本稿で検討してきたベイコンの『ニュー・アトランティス』やアンドレーエの『クリスティアノポリス』にも影響を受けて書かれたと言われている作品であるが、食についての議論を両者と比較してみるとどんなことが言えるだろうか。『マカリア』には食事シーンや飲食物そのものの具体的描写はないものの、関連する論点は含まれる。

> 「マカリア」という王国では、王と政治家たちは、非常に名誉ある裕福な暮らしをしており、国民は、豊富、繁栄、健康、平和、そして幸福のうちに生き（the people doe live in great plenty, prosperitie, health, peace, and happinesse）、ヨーロッパ諸国の国民の半分の苦労もないのです[40]。

このように『マカリア』においては、ベイコンの『ニュー・アトランティス』などと同様に、ユートピアの住民が健康な生活を享受していることが強調されている。ただし両者には若干違いもある。『ニュー・アトランティス』では自然哲学研究にもとづいて生みだされた種々の飲食物などが健康維持の機能をもつとされていた。『マカリア』でも、自然哲学の研究を基盤として作られるすぐれた医薬の存在が描写されているが、同時に健康を維持するにあたって医師＝聖職者がはたす役割が強調されている[41]。

『マカリア』の住民は豊富や繁栄のうちに生きているとも言われており、その豊富さや繁栄に深くかかわっているのが農業である。『マカリア』では農業は中心的テーマとして描かれている。プラッツや「ハートリブ・サークル」の人びとのあいだでは、農業の改良はきわめて重要な現実的課題として検討されていた。当時は、農業が堕落以前の人間の仕事に関係していると考えられたことなどから、農業の改良には宗教的な意味すら付されていた。プラッツ自身は社会問題、とりわけ貧困問題に関心をもち、教育などをとおした農業の改善によって、その解決をめざした人物であった[42]。

『マカリア』はイングランド議会による現実の改革を期待して書かれたテクストであって、マカリアにもイングランドのものと似た議会があるとされている。議会のもとには五つの委員会があり、その一つが農業委員会だとされる。マカリアにおいては、農業改革や土地の改良は法的にさだめられた国家的な事業である。所有している土地を十分

（projectors）から距離を取りつつ、独自の社会改良計画を実現しようとした例として分析している。Koji Yamamoto, *Taming Capitalism before Its Triumph: Public Service, Distrust, and 'Projecting' in Early Modern England* (Oxford: Oxford University Press, 2018), 104–131.

[40] "*Macaria*," 18 (「マカリア」147 頁).

[41] "*Macaria*," 19 (「マカリア」149 頁).

[42] Oana Matei, "Gabriel Plattes, Hartlib Circle and the Interest for Husbandry in the Seventeenth Century England," *Prolegomena* 11 (2012): 207–224; Matei, "*Macaria*, The Hartlib Circle, and Husbanding Creation." ハートリブ・サークルやプラッツと農業、およびその自然哲学的背景については、Webster, *Great Instauration*, 465–483 と、嘉陽英朗「畑の錬金術：16–17 世紀イギリス農学と錬金術化学」『経済論叢別冊 調査と研究』第 25 巻（2002 年）、49–67 頁も見よ。

に改良しない者は罰せられることになっているのである[43]。マカリアは、このような農業政策が基盤となって、豊かさや繁栄を享受しているように思われる。物語のなかで、マカリアを旅してその様子を語る旅行者は、みずからの経験をふまえて執筆した農学書を活用すれば、これまでの 2 倍の人口を養えるようになるとさえ述べている[44]。『マカリア』に見られるこのような方向性は、食料の増産という発想が見られなかったアンドレーエの『クリスティアノポリス』とは異なる[45]。

『マカリア』と同じように農業の改良による豊かなユートピアを描いた作品として、『ニュー・アトランティスの続編』（*New Atlantis. Begun by Lord Verulam, Viscount St. Albans: and Continued by R. H. Esquire*）が挙げられる。1660 年、つまり王政復古のその年に出版された作品である[46]。著者にかんしては R. H. というイニシャルだけが付されている[47]。冒頭のチャールズ二世宛献辞に明記されているとおり、内戦と空位期の混乱をふまえて、イングランドに適切な法による支配を取り戻す方策を論じることが、作品の主眼であった[48]。そのことを、ベイコンの『ニュー・アトランティス』の続編という形式で書いた理由は、著者によれば、ベイコンが法の専門家としてすぐれていただけでなく、『ニュー・アトランティス』のベンサレムが君主制国家として構想されていたことであった。むろん、君主制国家の物語は、王政復古後の安定的な法的支配の理想像を描く下敷きとしてふさわしかったという意味であろう[49]。

さらに、ベイコンの『ニュー・アトランティス』は、じつは未完のまま残され死後出版された作品である。出版を引きうけたウィリアム・ローリー（William Rawley, c.1588–1667 年）によれば、ベイコンは当初この作品で「一つの法体系、あるいは国家の最良の様態、ないしは型を記述する」意図をもっていたが、この意図の実現よりも、自然誌の研究のほうを優先した[50]。『続編』には、ベイコンの意図を実現するという意味もあったわけである[51]。

---

[43] "*Macaria*," 18–19 (「マカリア」148 頁).
[44] "*Macaria*," 21 (「マカリア」152 頁).
[45] 『マカリア』で農業生産力の増大という視点が強いことについては、田村『イギリス革命とユートウピア』19–20 頁を見よ。
[46] *New Atlantis. Begun by the Lord Verulam, Viscount St. Albans: and Continued by R. H. Esquire. Wherein Is Set forth a Platform of Monarchical Government. with a Pleasant Intermixture of Divers Rare Inventions, and Wholsom Customs, Fit to Be Introduced into All Kingdoms, States, and Common-wealths* (London, 1660). 『ニュー・アトランティスの続編』については、田村『イギリス革命とユートウピア』、266–275 頁、Houston, *The Renaissance Utopia*, 111–116 を見よ。
[47] Gregory Claeys, ed., *Restoration and Augustan British Utopias* (New York: Syracuse University Press, 2000), xxxiii は、『続編』の著者である可能性をもつ何人かの人物を挙げ、可能性がもっとも高いのはリチャード・ホーキンス（Richard Hawkins）という人物だとしている。Houston, *The Renaissance Utopia*, 111 n. 59 によれば、さらに別の可能性も示唆されている。
[48] *New Atlantis… Continued by R. H.*, a3^{r}–a3^{v}.
[49] *New Atlantis… Continued by R. H.*, Preface の 15 ページ目（頁番号が付されていない）、田村『イギリス革命とユートウピア』268 頁。
[50] William Rawley, "To the Reader," in Bacon, *Works*, 3:127 (邦訳『ニュー・アトランティス』6 頁).
[51] *New Atlantis… Continued by R. H.*, Preface の 17–18 ページ目。

先述のとおり、『マカリア』は 1640 年代初頭の時点で議会が主導する改革への期待をこめて書かれたテクストであった。一方で『ニュー・アトランティスの続編』は、王政復古のまさにその年に、国王によってすぐれた法の支配が取り戻されることを願って書かれている。しかしこのような違いにもかかわらず、食や農業にかんしては共通する問題意識が見られる。

『ニュー・アトランティスの続編』でも、やはり農業の改良は重視されている。舞台であるベンサレムの国にある各大学には農業カレッジが設けられており、植物に関連する種々の研究がなされていると言われている[52]。『続編』は『マカリア』とくらべて長いテクストであるため、農業に関連する内容もかなり詳細に語られ、具体的な飲食物の話も登場する。

物語のなかで主人公たちは、島でもっとも有名な農業カレッジをもつという大学に行き、さまざまなことを見聞きする。農業技術の内容についていえば、さまざまな植物が植えられた庭園があること、種まきや植え付け、接ぎ木や土壌改良についての実験が日々行われていることなどが書かれている[53]。これらの農業技術改良の話は、『ニュー・アトランティス』に見られたのと同種の内容であるように思われる。

しかし『続編』には『ニュー・アトランティス』や『マカリア』にない特徴が見られる。それは、農民が豊かな暮らしをしていると言われており、その暮らしの内容が描写されていることである。それによると、農業カレッジは農民たちの暮らしを豊かにするために、さまざまな義務を課している。それにもとづいて農民はミツバチを飼い、蜂蜜やさまざまな種類の果物を使ってすばらしい飲み物やおいしいワインを作っている。また燃料などのための木も豊富にあるし、アーモンドやオリーブ、栗やクルミなど実のなる木もあるとされる。さらに農業カレッジの研究として、穀物の病気などの災害を阻止することが挙げられている。そして輪作や施肥などの手段がとられていることが具体的に描写されている[54]。

5. おわりに：自然哲学と有用性

本稿では、17 世紀前半から中盤にかけて書かれたいくつかのユートピア作品を検討してきた。あつかった作品はいずれも、自然哲学（科学）や技術を基盤とするユートピアと言えるが、自然哲学やそれにもとづく技術の重視という共通点はありつつも、飲食物やその生産という観点から見てみると、各ユートピアのあいだには思想や強調点の違いがあったように思われる。

---

[52] *New Atlantis… Continued by R. H.*, 39–40.
[53] *New Atlantis… Continued by R. H.*, 79–81.
[54] *New Atlantis… Continued by R. H.*, 82–83.

自然哲学や技術の研究に力を入れている社会を描いたユートピア作品であっても、かならずしもそれらの研究が食の改良に結びついているわけではなかった。アンドレーエの『クリスティアノポリス』には、飲食物を自然哲学にもとづいて改良したり増産したりしようという傾向は見られなかった。クリスティアノポリスでは、適切な分配によって飢餓が起こらないよう最低限の飲食物が分配されると言われており、そのうえで宗教的・道徳的な規範として節制がきわめて重要視されていた。この節制という徳に照らして、そもそも飲食物を質や量の点で豊かにすること自体が、適切ではないと考えられた可能性が高い。

『クリスティアノポリス』で、自然哲学の実利的な有用性がまったく描かれていないわけではない。たとえば化学／錬金術の研究と、そうした自然哲学的知識を基盤とした医薬への言及が見られた。しかし全体として見るならば、この作品では実利的な有用性の有無にかかわらず、自然哲学の研究がそれ自体として宗教的な意義をもつことが強調されているように思われる。たとえばクリスティアノポリスの教育施設には自然学の講義室があるとされ、そのなかでは次のような説明がなされる。

> というのも、われわれが神のもっとも見事な劇場とも言えるこの世界に送られたのは、獣たちのようにたんに地上の食糧を浪費するためではありません。そうではなく、神の奇蹟のなかで見物者として、神の贈り物のなかで管理者として、神の御業のなかで崇拝者として歩むためなのです[55]。

『クリスティアノポリス』においては、自然哲学を発展させて神の業としての自然を理解すること自体が現世における人間の目標なのである[56]。

他方、『ニュー・アトランティス』や『マカリア』、『ニュー・アトランティスの続編』は、自然哲学の研究が飲食物の改良に直結する社会を描いていた。実利的な有用性がより強調されていると言えるだろう。だが自然哲学にもとづく飲食物の改良のなかでも、具体的に強調されている点には違いがあったように思われる。ベイコンの『ニュー・アトランティス』では、おいしさや健康効果など質の面で飲食物を改良していこうとする発想が強かった。描かれるベンサレムの国の中心機関「ソロモンの家」の研究紹介では、飲食物がもつ健康の保持や病気の治療、寿命の延長などの効果が強調された。これにたいし『マカリア』や『ニュー・アトランティスの続編』では、質の改良よりは量的な増産に焦点が当てられていたのではないだろうか。農業技術の改良による食糧の増産は、『マカリア』では維持可能な人口の増加に結びつくとされていたし、『ニュー・アトランティスの続編』では、農民の豊かな生活が実現されていることが描かれていた。

---

[55] Andreae, *Christianopolitanae descriptio*, 148 (「クリスティアノポリス」764–765 頁).
[56] この論点についてさらにくわしくは、副島「J. V. アンドレーエの『クリスティアノポリス』」27–28 頁も見よ。

すでに指摘されているように、ベイコンの『ニュー・アトランティス』は、「ソロモンの家」での自然哲学研究とそれにもとづく技術開発を中心とする社会を描いてはいるが、そこでは生みだされた知識について秘密主義がとられている。すなわち知識はオープンなものではなく、少数のエリート研究者である「ソロモンの家」のメンバーたちが公開を是としたものだけが公開されるのである[57]。さらに、ソロモンの家のメンバーたちとベンサレムの住民の関係、すなわち前者の後者にたいする秘密主義は、ベンサレムとヨーロッパ諸国の関係に重なる部分がある。物語のなかで、ベンサレムの人びとはヨーロッパ諸国の知識をもっているが、ヨーロッパ人はベンサレムのことをなにも知らないとされる。自然哲学にかんしても、ソロモンの家は他国での実験などの研究成果を秘密裏に収集するとされている一方で、他国に情報を提供することはない[58]。ホイットニーが指摘しているように、ソロモンの家の目標は「人間が支配する領域の拡大」（the enlarging of the bounds of Human Empire）と言われるが、実際にその研究成果の恩恵を受けられるのは人類全体ではなく、ベンサレムの人だけなのである[59]。そしてベンサレムのなかでも、ソロモンの家内部のエリート研究者たちだけが成果に完全にアクセスでき、住民にどの成果を公開するかを決定する力をもっている。

このように見るならば、『ニュー・アトランティス』でベイコンがおもに描こうとしたのは、自然哲学の研究がどのように遂行され、成果がどのようにコントロールされるべきかという問題だったと考えられるのではないか。飲食物に関連する描写もこの文脈で理解することが可能であるように思われる。本論文で見てきたようにベイコンは、「ソロモンの家」での農業技術研究はくわしく描写しているものの、その技術が島で実際に農業を営んでいる住民たちのもとで活用されている様子はほとんど書いていなかったからである。

他方で『マカリア』や『ニュー・アトランティスの続編』では、研究のみならず実際の社会のなかでのその応用に重点が置かれているのではないだろうか。『マカリア』では、農業政策によって個々の住民が土地の改良に従事していることが書かれていた。また『ニュー・アトランティスの続編』では、大学にある農業カレッジで種々の農業技術が研究されていることが描かれているだけではない。その研究にもとづいて農民にたいしてさまざまな義務を課しており、結果として農民たちは豊かな生活を享受しているの

---

[57] Bacon, *New Atlantis*, in *Works*, 3:165 (『ニュー・アトランティス』64 頁). 秘密主義について、たとえば Julian Martin, *Francis Bacon, the State, and the Reform of Natural Philosophy* (Cambridge: Cambridge University Press, 1992), 138–139 を見よ。

[58] Bacon, *New Atlantis*, in *Works*, 3: 139–140, 146–147, 164 (『ニュー・アトランティス』24–25, 35–36, 63 頁)

[59] Bacon, *New Atlantis*, in *Works*, 3:156 (『ニュー・アトランティス』51–52 頁). Charles C. Whitney, "Merchants of Light: Science as Colonization in the *New Atlantis*," in *Francis Bacon's Legacy of Texts: "The Art of Discovery Grows with Discovery"*, ed. William A. Sessions (New York: AMS Press, 1990), 255–268 のとくに p. 258 を見よ。

である。だれにとっての自然哲学の有用性を描くのかという点でも、ユートピア作品は多様であったと言えよう。

もちろん、たとえば『ニュー・アトランティスの続編』の記述を読んで、農民の生活を豊かにするということが真の目的だったと素朴に理解することはできないだろう。すでに見たように、この作品は王政復古の年に、強力な国王権力のもとで発展する国家を描いた物語である。農民の豊かな生活が強調されたのは、王国の安定のための救貧政策という観点からだったと言われている[60]。しかし本論文で見たように、農民たちが豊かに暮らし、さまざまなおいしい飲食物を享受していることが描かれていたこともたしかである。たとえば、『クリスティアノポリス』で描かれた、最低限の食糧の提供による貧困の除去という発想と比較するならば、『ニュー・アトランティスの続編』では、たんなる貧困の除去以上の生活水準の向上が強調されているとは言えるのではないか。

本稿であつかうことができたユートピア作品やその社会的背景は限定的なものにとどまる。しかし少なくとも次のことは言ってよいように思われる。フランシス・ベイコンやその影響を受けた 17 世紀イングランドの思想家たちは、自然哲学研究が実利的な有用性をもたらすという確信にもとづいて、自然哲学を鍵とする国家をユートピアというかたちで構想した。しかし国家のなかで自然哲学がどのような役割をはたすのか、どのような、まただれにとっての有用性を実現するものなのかは、多様でありえた。隠岐は、18 世紀フランスの王立科学アカデミー周辺での科学の有用性に関連する議論を分析し、その内実が実利的なものから精神的なものまで多様だったことを指摘しているが、部分的には類似の多様性が 17 世紀のイングランドにも存在していたと言えるかもしれない[61]。そしてユートピア作品のなかの飲食物に関連する記述は、著者の自然哲学観を映しだす、一つの鏡となっているように思われる。

---

[60] 田村『イギリス革命とユートウピア』271–272 頁。

[61] 隠岐さや香『科学アカデミーと「有用な科学」：フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ』（名古屋大学出版会、2011 年）のとくに 50–53、59–63、130–161 頁を見よ。